

幼児期から児童期にかけての対象操作とイメージとの関連

(平成25年度学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究に採択)



人間心理学科
野田 満 教授

子どもの発達にとって周りの世界を認識する仕方は重要な事です。ただ見るだけでは対象物が本当のところどうなっているかわからないので、手を使ってひっくり返す、大きな対象物なら自ら移動して回り込んでのぞいてみる、ということをしします。目をはじめとする感覚諸器官はあるポジションからの情報しか得ることが出来ません。そのため乳幼児期では対象へのかかわりを十分に取れるように、対象になんらかの探索的かつ能動的な行為(action)を起こそうとします。こうなるという予期に基づき状態を変えることが出来るようになります、自分の予期と行為の結果との一致不一致から、格段に認識が広がっていきます。このようにして能動的な空間行動により対象の性質や構造そして自分との関係等についての多くの情報を得ていくと考えられます。対象にかかわる能動的な行動を起こすことで、見えていなかった自分と対象との関係や対象間の関係が発達と

ともにわかってくるのですが、認識を成立させるために自分自身の身体のある方が大変に重要な役割を演じています。傾いた対象を比較して同じか異なるかを識別しなければならぬ状況では、重ね合わせるなどの操作を何らかの方法で行い調べる必要があります。しかし対象そのものを動かすことができない場合、頭の中でまずイメージを浮かべて、次にそのイメージを交換していく作業が行われます。しかし十分にイメージを操作できない年齢の低い子どもたちは、自分の身体を用いてイメージを運ぼうとすることがわかってきました。この身体利用には様々なパターンがあるようですが、身体にイメージそのものを乗せ、対象の側を変えようとする場合と、身体そのものを対象に合わせようと自分の側を変える場合の2種類に分かれるようです。これまで視覚的イメージが絵のようなものと捉えられていたのですが、実は運動要因が含まれているということが多

数の研究結果で確認されつつあります。その運動要因を担うのはまさしく身体であるという点からも、身体利用はイメージ研究にとり重要な領域となってきました。

文部科学省の科学研究費である挑戦的萌芽研究には、新しい原理の発展や斬新な着想や方法論の提案を行うものがある点、または成功した場合に卓越した成果が期待できるものである点等が求められています。自分の身体、特に手を用いてそこにイメージを乗せて変化させていく「ひきうつし(Hikitsusushi)」と命名した、イメージの身体利用がどのような条件下で生じるのか、またどのような機能が関連し合うのかはまだ十分にはわかっていません。人は道具を使う動物であるという言葉がありませんが、その意味では、ひきうつしの解明は人の本質の起源に迫るものがあるといえます。対象操作がどのようなされるか、手の空間座標の変化や活動性などを指標に検討していく予定です。

科学研究費補助金(学術研究助成基金助成金)が交付された研究を紹介します。